



日口交流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンシヨン401号

Tel : 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



春の祭典

安部 花子

3月23日、田町リーブラにて春の祭典に参加しました安部と申します。例年実施しているマースレニツァですが、今年は少し時期がずれてしまったため春到来のお祝いとして「春の祭典」を開催いたしました。春を祝う習慣は、日本の春分の日と同じように中央アジア地域でも「ノウルーズ」という国家の祝日になっており、今年はロシア国内だけでなく中央アジア地域の歌や踊り、北欧や中東の楽器とのコラボレーション演奏も楽しめる、とても多様性に富んだ個性あふれる催しとなりました。

祭典の始まりは、チェチェンの祝祭の踊り「ダイモク」からスタートです。「故郷」という意味の気高い山岳民族の精神性を体現した力強い舞踊で、観客はその世界観にグッと引き込まれます。出演は、北コーカサス諸国の伝統舞踊レズギンカのアジア圏における第一人者である野崎大我氏と、野崎氏と同じく民族アンサンブル「ロアム」のメンバーであるアゼルバイジャン出身のオリエンタルダンサー、ディララ・ガジェワ氏。指先の動きにまで注意が払われた振付やステップは、まるで美の神様が出演者の体を借りて動いているように



も見えて、息をのむほどの神秘性すらも感じさせます。

最初の演目からかなりレベルの高い芸術を目の当たりにした我々でしたが、その後も

見るものを釘付けにしてしまうような様々な国や民族の素晴らしい作品が続きます。伝統衣装を身にまとったロシアの舞踊「カリンカ」「モスクワのカリドール」澄んだ歌声で観客を魅了するロシアの名曲「アフトゥイ」「カチューシャ」、エキサイティングなコサック剣舞や臨場感あふれるウズベキスタンやダゲスタンの舞踊、スウェーデンやアラブの民族楽器とコラボした多様性あふれるチェチェンの楽器演奏、民族舞踊家の女性3名による目にも華やかな美しいウズベキスタン舞踊——。ロシアという国がいかに多くの民族・文化を内包した国であるかを改めて思い知らされます。一部の地域を除き、ほぼ単一的な民族構成である日本において多様性とともにもどう歩んでいくべきか、ロシアから学ぶことは非常に多いのではと感じました。

ホールでのコンサート終了後、調理室に移動しみんなで軽食を食べながらの懇談会。岩橋さんお手製のサリヤンカと、私が早朝から拵えたブリヌイ100枚、その他お菓子や軽食を出演者と観客の皆様に分ります。美味しいものを食べながらの和気あいあいとした雰囲気の中、なんと春の祭典・第二弾が勃発。観客との距離が1メートルもないなか、同じ目線で出演者の皆様が舞い踊り、それを間近で見えて歓声を上げる観客たち。素晴らしい舞台設備がゆえ、ホールでは心なしか緊張した雰囲気もあり出演者と観客の距離が少し遠い様子でしたが、ここではお構いなし。出演者と観客の垣根が取り払われ、リラックスした雰囲気の中、同じ目線で和気あいあいといと大いに騒ぎ楽しんでおられました。これは昨年マースレニツァでは見られなかった現象で、ゲリラパフォーマンスも得意とする出演者面々の面目躍如といった様子。名残惜しい雰囲気の中で解散となり、今年の春のお祝いも大成功に終わり、がんばって下準備した我々ボランティアの努力も本当に報われました。また来年も、嬉しいサプライズが連発するような春のお祝いを開催できたらいいと思います。

お知らせ

●キルギス料理講習会 (2)

日時: 2025年6月22日 (日) 9:30~12:00

場所: 田町「リーブラ」料理室

●茶道体験交流

日時: 2025年6月1日 (日) 9:40~12:00

場所: 六本木「麻布区民センター」2階和室

●東郷和彦氏講演会

テーマ: 「ウクライナ 外交的解決への道」

日時: 2025年6月14日 (土) 15:00~17:00

場所: 浜松町「ビジョンセンター浜松町」

会費: 2000円

*講演会終了後に夕陽ヶ丘食堂にて懇親会あり。会費6000円
申込方法: ①氏名②所属③連絡先メール、電話番号④講演会を知ったきっかけ⑤懇親会への参加希望有無を記入。

●ロシア語の泉 (14)

2025年5月11日、6月15日、7月13日 (日) 13:30~16:00

授業料: 会員7000円、一般8500円 (全3回)

●イワン・クパーラ祭

日時: 2025年7月13日 (日) 11:00~

場所: 日影沢キャンプ場又は郷土の森公園

参加費: 会員、外国人2000円、一般2500円

●ロシア語教室生徒募集中!

レベル別クラスを日本語堪能、経験豊富なロシア人教師陣が担当いたします。プライベート、オンラインレッスンもあり見学も1回可能。事務局までお問い合わせください。

Fax: 03-5563-0752 E-Mail: nichiro@nichiro.org

お願い

NPO 日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。なお、寄付とわかるようにお名前の前に番号「01」と入れてください。

振込先: 郵便口座 00160-9-66486、加入者: 日口交流協会

連絡先: 日口交流協会事務局 E-Mail: nichiro@nichiro.org



きもの体験交流(1)通商代表部

千葉 麻里

恒例のきもの体験の第1回目、今年は4月29日(水) 11時から午後3時頃まで、通商代表部のホールで行われた。

いつも通り、敷物が敷かれたホールで、ダンボール2個分のきものを広げる。今年は子どもの人数が多く、身長75センチから130センチの男女の子どもが12名いた。女の子は3歳用、7歳用と七五三の中古のきものを入手するのは簡単だが、男の子は5歳用のみで、通常130センチくらいのもは出回っていない。5歳用の子どもの肩揚げを解いたり、大人用の小さめのものを工夫して着せたりしなければならない。

それでも、全員満足して、着ると途端に外に記念写真を撮りに出たりして楽しんでもらった。男の子はいいいによっておもちゃの刀を持ち、女性は扇子や傘を用意している。小さな子どもは最初は不安そうにしているが、お母さんになだめられながら着るとすっかりお姫様や侍になってみせる。

今回は希望者が30人だったが、仕事の関係で数人が残念ながら参加できなかった。次の機会をまた設けますので、と約束して終えた。



今回、共に着付けを担当してくれたのは、森先生と五十嵐先生。二人とも、きものコンサルタント、講師として東京都連盟の委員長経験のあるベテランで、ほとんど打ち合わせもなく当日に臨めるメンバーである。様々なトラブルにも対応できし、たいいていのことには動じない。一口にきものと言っても、

大人と子ども、男女でも違うし、種類もあるので簡単ではない。その点、多少のやり方が違ってもお互いに呼吸を合わせられるだけの経験を積んでいる。

いつもながら通商代表部の窓口のエレーナさんも色々と気を遣ってくださり、飲み物を用意したり、最後にロシアのお菓子をくださったりと有難かった。先生方もボランティアでも、皆さんの喜ぶ様子を見て楽しんで着付けができたと言ってくれた。

日本のきものの美しさは格別で、どこへ行っても関心を呼ぶ。この貴重な技術が失われることのないように日本人としては守っていききたい。
(副会長)

高級ホテルに生まれ変わった函館の「旧ロシア領事館」

倉田 有佳

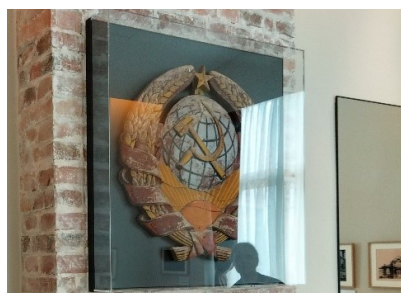
函館の「旧ロシア領事館」が名古屋市の企業「ソヴリン」に売却が決まって4年、いよいよ7月12日に「HOTEL 白林(びゃくりん) HAKODATE」としてオープンする。去る4月24日に一般公開され400人以上が見学に訪れた。

この建物は、在函館ロシア領事館として1903年に建設工事が着手された。しかし、1904年2月に日露戦争が勃発したことで、工事請負人の山辺為吉まで要塞地帯函館からの強制退去を命ぜられ工事は中断。戦後、工事が再開され、1906年12月末に完成するが、翌年の函館大火で全焼。すぐに同じ場所で再建工事が始まり、1908年12月に完成した(現存)。

設計は、同志社クラーク記念館(国重要文化財)の設計者でもあるドイツ人のリヒャルト・ゼールである。ゼールが日本を去った後は、デ・ラランデが引き継いだ。

1925年にロシア領事館の建物はソ連領事館に引き継がれたが、補修工事が必要だったためオープニングからしばらくの期間、「元キング邸(通称堤俱樂部)」で執務が行われた。

1944年10月1日、ソ連領事館は閉鎖された。戦後、建物の所管が外務省に移り、外交レベルでの交渉の結果、ソ連側が建物の権利を放棄したため、1964年に函館市が外務省から建物を購入した。1996年までの30年間、宿泊研修施設「函館市道南青年の家」として活用され、ここで多くの地域住民が、畳敷きに変更された大部屋等に宿泊まりし、裏の庭でキャンプファイアーを楽しんだのである。筆者は1985年の夏



に初めて函館を訪れた際、建物見たさに急な勾配の幸坂を上って行った。すると函館とソ連の交流史をパネルで紹介した「資料館」が新設されたとのことで、宿泊者以外も建物内部への立ち入りが許された。これに大いに感激したものである。近年は「ゴールデンカムイ」ゆかりの場所として建物を見にやって来るファンも多いらしい。

一般公開と同日、筆者は招待者枠の時間帯にゆっくり見学させていただいた。小学生の時に宿泊したという40代男性は、「1泊2食付で31万9千円(2人一室)! 当時は1泊100円くらいだったのに」と驚いていたが、二階の客室を見てのとおり、元領事館部分は2室のみの「スモール・ラグジュアリーホテル」に生まれ変わったのである。

一階はレストランやバー、そして領事館ゆかりの古写真やソ連領事館時代の国章を壁に飾ったギフトショップが置かれていた【写真】。木製の国章は歴史的価値のある資料で、小麦の穂に巻き付いた赤いリボンには、1922年12月30日に誕生したソビエト社会主義共和国連邦を構成する共和国(ロシア、ウクライナ、ベラルーシ、ザカフカース社会主義連邦: グルジア・アルメニア・アゼルバイジャン)の6つの言語で「万国の労働者よ 団結せよ!」の文字が記されている。

改修箇所や部材選びの検討に多くの時間が割かれたそうだが、それを支えたのがオーナー夫妻の建物への愛や歴史を重んじる心であることが、見学を通して実感された。(ロシア極東連邦総合大学函館校教授)

ウズベキスタン便り

タシケントのレストラン

川端 良子

ウズベキスタン料理店が東京でもいくつも見られるように、タシケントもいろいろな国の料理店があります。一方で、ウズベク人が行くレストランはお酒を置いていないお店が増えました。純粋にウズベク料理を食べに行くのならウズベクレストランがいいと思いますが、お酒も一緒に楽しみたいと思われる方は、ほかの国の料理店をお勧めします。他国の料理店とうたっている、ウズベク料理は必ずと言っていいほど用意されています。

ソ連だった影響とワインが世界的に人気となっているジョージアレストランはジョージア料理とロシア料理を楽しめるお店もあります。以前よりロシア料理店が減っている、ロシア料理を楽しみたいと思う方に、おすすめです。アルメニア料理店、アゼルバイジャン料理店、チェコ料理など日本でなかなかお目にかかれないレストランもあります。

一方、スターリン時代の名残で韓国人が住んでいることから、韓国レストランはいくつもあります。タシケントには、韓国バザールと呼ばれている韓国食材が手に入りやすいバザールもあります。キムチなどの小皿がたくさん並ぶ韓国レストランには、サバの塩焼きやうどんなどのメニューも置いているところもあり、駐在している日本人に合うことも多いです。近



ジョージアレストランにて

年、ヨーロッパ系のレストランも増えました。イタリアンレストランは予算に合わせてお店を選べるほど増えています。中にはブラータチーズなどのフレッシュチーズを店内でつくって提供しているレストランもあり、ゆっくりと食事を楽しめます。

ただ、タシケントは車で移動するのが普通になってしまったので、お店が歩いて行ける場所に集約しているようなところは少ないです。そんな中、タシケントシティと呼ばれる地域にあるショッピングモールは、いろいろな国のレストランも入っているので、時間がなくショッピングも楽しみたい方にお勧めです。

以前から中国料理店はありましたが、近年、日本でいう「ガチ中華」、中国人のための中華料理店も増えています。中国人人口が増えているので、需要に合わせて増えているのだと思います。

ただ、レストランはウズベキスタンで今もハレの場の感じが強いです。お店も洒落ていますが、値段も決して安くはありません。もっと外食産業が盛んになれば日本のファミレスみたいなお店も増えるのかもしれない。

(日本ウズベキスタン協会理事長)

夏の夜明けは深夜(続)

浜野 道博

ロシアは北国なので夏と冬の日照時間の差が大きい。モスクワはカムチャツカ半島南端とほぼ同じくらいの緯度でずいぶんと北にある。そのため、例えば夏至の日の屋外の明るい時間は冬至の日より11時間長い。朝3時にはぼんやり明るくなりはじめ、夜は11時頃まで薄暮の世界である。

日本では季節の訪れを「寒暖の差」で気付かされることもあるが、ロシアではそれに加えて「明暗の差」とでも言うか、「夏はほとんど明るく冬はほとんど暗い」ことに慣れなければいけない。

その昔モスクワ大学に留学したとき、9月から始まる新学期にヨーロッパからも留学生が来ていた。どんよりとした秋空のもとで日中の明るい時間が駆け足で短くなってもドイツ人たちは平気だったが、イタリアから来た女学生はまわりが心配するほど日の光を恋しがったものだ。

それと夜になって灯す電球の輝度が低く、なんだかロシア人はだれもかれも暗がりで生活しているような印象を受けた。あまり暗いので電灯を少し明るくすると「目がチカチカするから止めてくれ」と叱られたこともある。街頭も暗かった。東京から着いたばかりの日本人はモスクワの暗い空港で最初のカルチャーショックを受けたものだ。

しかしそれも昔の話、最近のモスクワの市街地は煌々と街灯が輝き、歴史的建造物や市内の主要なビルは美しくライトアップされている。大型商業施設は夜でも昼間のように明るい。数多いモスクワの広場や地下鉄駅の地上周辺はことあるごとにイルミネーションで飾られ華やかである。夜のとぼりが早々と降りる冬の夕暮れは繁華街の光がまば

ゆい…

しかしどこか怪しい… 夜の闇を追い散らそうと無暗に光を放っているようにも見える。気のせいだろうかそういう光源から遠ざかるにつれて夜が余計に黒くなる。

モスクワの住宅地もソビヤーニン市長になってから街灯が増え夜安心して歩けるようになったが、それでも集合住宅の立ち並ぶ隅々まで明るいわけではない。せめて集合住宅の共同階段の1階出入口の照明が改善されただけでもありがたい。最近ではこの出入口の扉に透明ガラスが入り扉の向こうに人がいるのかどうかが見えるようになって犯罪が減ったという。

人々は我が家では昔ながらの薄明りの生活である。卓上灯、フロアスタンドの淡い光が好まれる。それは、蝋燭や電気の節約から始まったことかも知れないが、もはやロシア人の生活スタイルになって視力もそれに馴染んでいる。

冬の長いロシアは夜も長い。100年ほど前までは戸外で農作業ができない冬に農民は暖かいペチカの上か脇で寝転がるしかなかった。しかし農民も精勤な者は冬の暗い灯明のもとで木工細工に励み、いずれはロシアの民芸品を生み出すことになる。モスクワ総主教府から分離した古儀式派に属する農民はおおむね勤勉で知られるが、彼らが集住するニジニー・ノヴゴロド州、それもボルガ河の向う岸は今日ロシア民芸品の中心地の一つになりロシア史の歩みにも縁の深い土地である。モスクワを訪れた際には少し足を東の方に伸ばして彼の地に親しまれるようお勧めしたい。

ヤースナヤ・ポリャーナ

畔上 明

私にとって、ロシアの中で最も訪れておきたい地が「ヤースナヤ・ポリャーナ」でした。

「戦争と平和」を始めとする数多くの小説を著わしただけではなく、農村の子供たちへの教育、貴族の身を恥じての農作業、身をもつての反戦、貧民街の民勢調査といった社会活動、13人の子育て、沢山の孫との関わり、その多様な顔を持つレフ・トルストイ（1828-1910）が生まれ、生涯の50年以上を過ごしたヤースナヤ・ポリャーナ、その場所に足を踏み入れる機会は思いのほか早くにやってきました。

1977年春、社員募集の新聞広告を目にして「日ソ旅行社」に入社した26歳の私は、1980年のモスクワ・オリンピック開催に伴って会社を一回り大きくするつもりで人材を募ったのだと新川社長から伝えられました。

しかし、1979年12月のソ連軍アフガニスタン侵攻、そしてアメリカ、更に日本等の国々が翌年のオリンピック・ボイコットを表明し、会社が事前に仕入れていた大量の観戦チケットが無駄となり大損害を被ったのです。

会社が危機的状況に陥りながらも、1980年10月に翌年の契約をするため国営旅行社インツォリストのモスクワ本社プロトコール（儀典課）に75歳の社長のお供として出掛けることになりました。数日間の交渉を終えた後に、モスクワ滞在の最終日にはどこか訪れたい場所があればご案内しますとのこと、「特にないので休息の日とする」と答えかけた社長に、陰から私が「ヤースナヤ・ポリャーナに連れて行ってもらうことが出来れば」と囁き、実現したのです。年長者を重んじるロシア、新川社長の付添い役としてインツォリストの年長者デボヤン女

史が後部座席に並び、私は運転手の隣席で道中の景観に没入、モスクワから南に200kmのガタガタ道をこころ踊る思いで進んでいきました。

トルストイが2歳となる前に亡くなった母マリア（1790-1830）が受継いでいたヴォルコンスキー公爵家の1800ヘクタールもの領地、8歳のときに父ニコライ（1794-1837）が急逝してからは叔母たちの世話となったトルストイは18歳でその領地を相続したのですが、20歳前後は放蕩生活、さらにその先学校運営資金のため本宅を売却するなどで400ヘクタールにまで縮小してしまいました。

とはいえ、それでも皇居の3.5倍の広さ、白い円柱の門を通れば白樺の並木道、楓、オーク、トネリコの庭園、リンゴ園、水浴場、「緑の杖」の思い出の場に葬られた土饅頭の墓、そしてトルストイ邸に入れば、2万2千冊の蔵書、2階の客間兼食堂には2台のピアノといった具合にトルストイ生前のまゝの状態で保存されています。

トルストイの小説には、その時代の時事を素早く捉えた作品もありますが、多域にわたる表現の中でも読んでいて人生に対する肯定感を得られ、至福の思いに包まれる、その秘密を私は長年探っておりまして。

その回答として、山城むつみ氏による見事な表現に出会ったのです。トルストイの身体的な生命感覚は赤ん坊の本能的感受性がそのまま大人になっても損なわれず、その感覚が世界や人間を判断、そして「道徳」に置換わるようなことはなく、「正直でかつ明瞭な目」を通した「鮮やかさ」が文体として定着しているのだ、と。



<新刊紹介>

誰も知らないロシア

若手外交官が見た隣国の素顔

石川 知仁著

彩流社 3,520円（税込）

「ロシアは頭では分からない」というチュッチェフの有名な一節。本書の冒頭で著者は、この言葉はロシア専門家によってある種の「免罪符」として引用されてきた、と指摘します。ともすれば専門家までが「謎」と諦観してしまうこの隣国のことを私たちはどれだけ知っているのか、そう問いかけるところから本書は出発します。続く10章と15のコラムで語られるのは、2018年から23年にかけてロシアで暮らした著者が見たロシア芸術文化の今とロシア人の素顔であり、著者にとってロシア文化への「扉」となった出会いの数々です。孤高の画家ヴルーベリの描いた「デーモン」からラッパーたちの叫ぶ「戦争反対」まで、あるいはバター祭り（マースレニツァ）の死闘から罵倒語（マツト）の使い方まで、伝わりにくいロシアの諸相が点描され、最後はロシア文化を象徴する「対話」への希望で結ばれます。「何度も打ちのめされ、それでもなお、対話をすべきなのである。」

【目次】

はじめに「ロシアは頭では分からない」？ —失った感覚の正体を探す試み

第Ⅰ部 体験的ロシア文化論—生き続けるロシア芸術文化の今を知る

〈絵画〉「デーモン」の誘惑—ロシア文化の坩堝の中〈演劇〉言葉に生命が宿る瞬間

〈音楽〉「音楽が私たちを結び付けた」

〈映像〉ロシア人はロシア映画に興味がない？

第Ⅱ部 隣国ロシアを誰も知らない—普段の生活と素顔のロシア人を知る

〈生活〉衣食住の考現学

〈祝祭〉祝日の過ごし方（あるいは祝い方）

〈日常〉モスクワの日常から知るロシア人の「常識」

〈言語〉ロシア語はロシア人にも難しい

〈性格〉ロシア人の考え方、感じ方を知るために

〈笑い〉笑うロシア人—笑わせるのは何、笑われるのは誰？

おわりに それぞれの「戦場」、失った感覚の正体、「対話」のすすめ

（彩流社・奥村勇斗）

